

# 「家がいいね」 第24号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2006.5.11

皆さんに「次の号を待っているよ」と言われ本当に甲斐があります。「**甲斐は待つより駿河(するが)よい**」と受ける言葉のとおり、自分の力で続けられる内容を紡いで行きたいと思います。

## 「絆(きずな)」とは

糸が半分ずつ絡みあっている形から来た言葉と早川一光さんの本で知りました。早川さんは京都西陣の町で早くから往診に取り組み、その話はユーマアたっぷり「ワラジ医者」の別名があります。誰もが、半分ずつの糸を絡み合わせ、生きています。糸をわずらわしいと思っか、頼みに思っか、定まりないものです。この絡み合いが上手に繋がって、気持ちが行き来するのが、「結い」の状態。その中でも、本当に気の遠くなるような難しい出会いが「縁」と名付けられます。早川さんは、この「行き来」が実は「いきいき」なのだ、と言います。「いきいき生きる」とは縁の連続した出来事ですから、身体は寝たきりでもかまわないではありませんか。老いるとは心がいきいきすること。私もそう思います。



## 常民として生きた老医師の背中

春の嵐の朝、毅然として、その老医師は自宅で亡くなられました。数ヶ月、私はその方の働く真っ直ぐな背中を見て教えられました。カルテの字と同じく誰にでも変わらない態度でした。過去の日本には言葉少なく訥訥と働き、その人の生き方を誰もが了解している「常民」が居られました。残す言葉はなくても、町医者として逝く時にも「順縁」を選ばれた、そう感じます。

私自身、3年の間に、祖母・祖父・父を順に見送りましたが、年寄りの死には幸運を感じました。今、父が経験しなかった年齢を私が歩んでいます。決して見えない父の背中、老医師に重なります。

## 山が笑う

里のいつせいの開花の後に山には様々な緑が萌えあふれます。それを水面に写して、田植えの時期も終わりつつあります。今度は、緑が平地に降りる番です。

## 命をつなげる祭り

伊勢の町に、お木曳きが始まりました。「二十年毎」という期間と「奉曳」という行動

に、命の循環の不思議を見る思いがします。大のおとなが一生懸命作り上げる祭りに、子供が自分のことのように喜び回り、年寄りが記憶を洗濯して心を躍らせる。身体を動かす事で心が沸き立つ、何事にも替えがたい喜びです。



## そして命をつなげる語り合いを

プレ勉強会(生と死を考える市民の会)

「大集合…皆で語り合おう」

緩和ケア、私ならこうしてほしい!」

5月21日(日) 13時~15時  
三重大看護学科(津市江戸橋)にて、

内藤いづみ 講演会「いのちをつなぐ営み」

今こそ看取りを皆で考えよう

7月2日(日) 13時~15時  
三重県教育文化会館(津市駅前)にて



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805

三重県伊勢市御園町高向 927

電話 0596-20-8104

ファクス 0596-20-8105

mail [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)

HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>